

巻頭言

谷 賢一

Tani Kenichi

ペンの力

少し前の話になるが、夏。都知事選で大敗を喫した元ジャーナリスト丁氏が、敗戦を語るインタビュアーでこんなことを言っていた。

「ペンの力って今、ダメじゃん」

そして私は激怒した。ふてえ野郎だ。許せねえ。言葉で食ってる人間の風上にも置けねえ奴だ。ついでのように抜け抜けと「ペンはダメじゃん」なんて言ってるのけ（しかも語尾が「じゃん」と来た）、トホホな顔をしてみせる。それは卑怯だ。堪忍ならぬ。

……と、怒り狂うのには理由がある。自分も実は、彼の気持ちかわからんでもない。言葉は今、無力かもしれない。そう思う夜は確かにある。特に夜中にそう思う。

しかしそんな時、自分のような小僧っ子でさえ、だからこそ書かねばならぬと歯あ食いしぱり、次の一文字を書いている。「ペンがダメ」と嘆いてどうなる。そうやってんのは誰のせいだ、俺に気迫がねえからだ、足りねえからだ、ごめんよ世の中、そしてペン様、俺が不甲斐ないばかりに！書くよ！書くよ！書くぞー！と真夜中、わーわー言ってる、虫けらの俺もデスクライトの光にかじりつき、書くのだ。惨敗とはいえ130万票集めた男が「ペンはダメじゃん」なんて言うのは、やっぱり卑怯だ。許せねえ。それはペンの現在を嘆いているようにいて、ペンの未来の足を引っ張る自殺行為だ。

劇作家なら誰だって、たった百人しか観

ない芝居の、そのうちのたった一言にまで魂注いでペンを振るった経験があるはずだ。その一言は小さな小石だったかもしれない。しかし数年経ってから、その小石を後生大事に持っていてくれた観客と出会ったりする。「あのときの台詞、忘れられませんが」。小石一つで動くほど世の中は軽くないが、一人の心は動かせる。なら自分の非力を嘆くより、みんなで小石じゃんじゃん投げよう。それしかない。そうでありたい。あらねばならぬ。

楽観はしてない。明るくもない。だからこそ敢えて言おう、自分を奮い立たせるように。

「ペンは強し」。どうぞ皆さんも一緒に！